

新伊達博物館展示設計業務

設計説明書(概要版)

2023年6月

株式会社丹青社

1 実施方針と期待される効果

1.文化財を守り伝える

これまでの事業ノウハウを継承し、災害への万全の備えを図ります。

2.対象は宇和島全域

旧宇和島、吉田、三間、津島を含めた宇和島圏域全体の資料を扱います。

3.ふだん使い・憩いの場

公園との親和性と市民が何度も訪れたい施設を目指します。

4.市民みんなで活動

中長期に渡り継続する活動体をかたちづきます。

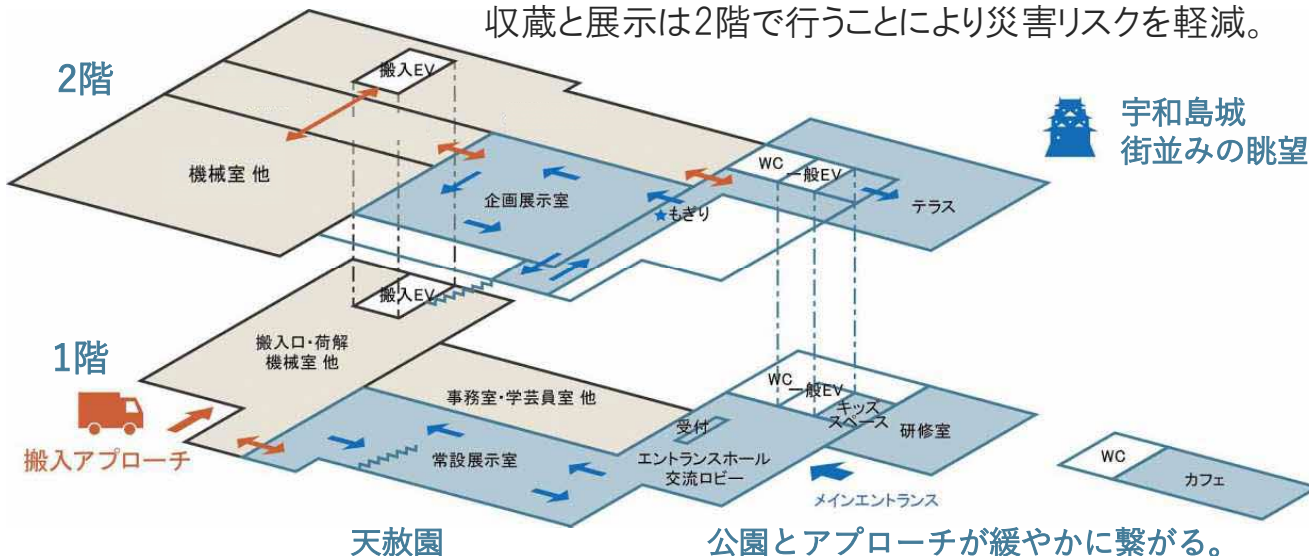
宇和島市の活性化の知恵袋として、地域振興・ブランド力向上に寄与します。

2 施設構成

公開承認施設基準に基づき
資料動線と利用者動線は明確に区分

気軽に入りやすく、ふだん利用できる施設を目指します。

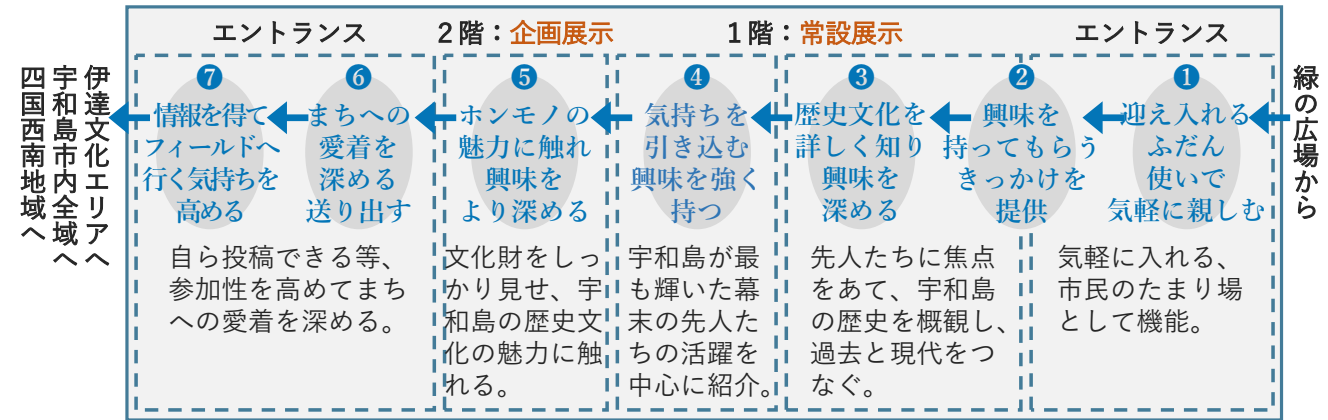
貴重な文化財※は、利用者との動線を明確に区分、収蔵と展示は2階で行うことにより災害リスクを軽減。



※貴重な文化財＝(公財)宇和島伊達文化保存会所蔵資料を中心とする、宇和島の歴史文化を明らかにする全ての資料をいう。

3 展示の役割と流れ

展示の冒頭で、気持ちを引き込む・興味を強く持つことにより、その後の展示に興味を一層深めてもらいます。



4 展示の基本的な考え方

市民が気軽に利用できるように、訪れる人々に寄り添った展示空間を目指します。

1.入りやすい

- ・明るく開放的で「何があるのか入ってみたい」と感じさせる展示空間
- ・間口が広い(公園から建物内の人の様子が窺える)
- ・格式張らない、仰々しくない展示

2.滞在しやすい

- ・座ってくつろぐことができる。市民がちょっとした勉強や本を読むことができる。
- ・バリアフリーに配慮し、広々と動きやすい。
- ・市民や観光客をもてなすしくみをつくる。

3.解りやすく、使いやすい

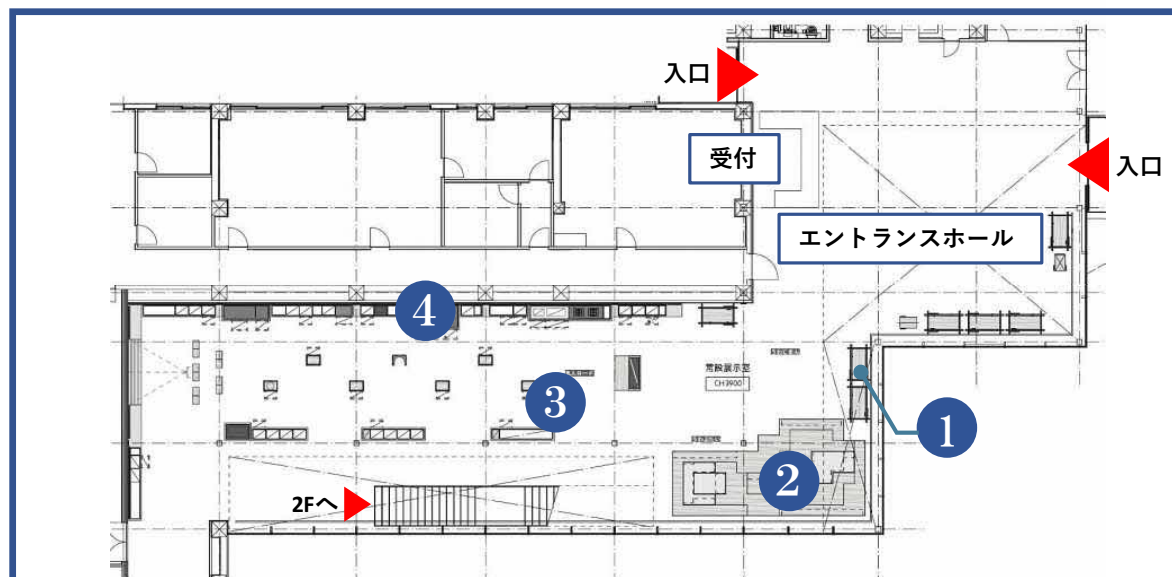
- ・ユニバーサルデザインを取り入れ、誰もが使いやすい、解りやすい展示。
- ・宇和島の歴史文化を時間軸を追って概観し、どこからでも入り直すことができる。
- ・解りやすい解説で解りやすい動線。
- ・興味を持ったところから、深く入っていきるしかけを用意した展示。
- ・いつも何か新しい要素を取り入れることができ(更新性)、触れたり(ハンズオン)、体験を通して気軽に親しめる展示。
- ・通常の解説とは別に、楽しい展示解説(トピックなど)がある。
- ・来館者が参加でき、その反映が見られる展示(自分が残したコメントを再訪することで確認できる等)。

1階の観覧参加体験型展示で親しみ、2階のホンモノの魅力で深める、抑揚ある展示を実現



災害リスクの観点から、文化財（実物資料）は2階で展示。全体をとおし**更新性・可変性**に留意、生き活きた展示空間を目指す。

市民が日常的に気軽に利用し、訪れる人々に寄り添い、新しい出会いのある展示を目指す



① うわ！じまん（うわカーゴ）

屋内や屋外へ自由に展開できる可動式展示什器

- ・市民が自慢したいものや季節の催事に合わせた展示など可変性の高い展示。
- ・将来的には市民に貸し出し、活動を博物館外にも広げていくことも視野。



② うわぶたい

展示室とロビーをつなぐ空間に人が滞在できる機能を整備

- ・段畑のような舞台でくつろいだり、自由に展示・閲覧利用できる機能。

③ 常設展示室

先人ロードを中心に、多様なコンテンツと更新性に溢れた展示

- ・現在の宇和島市域を中心に、広く旧宇和島藩領及び旧吉田藩領を展示の対象とし、定期的にコンテンツを更新できるようにする。

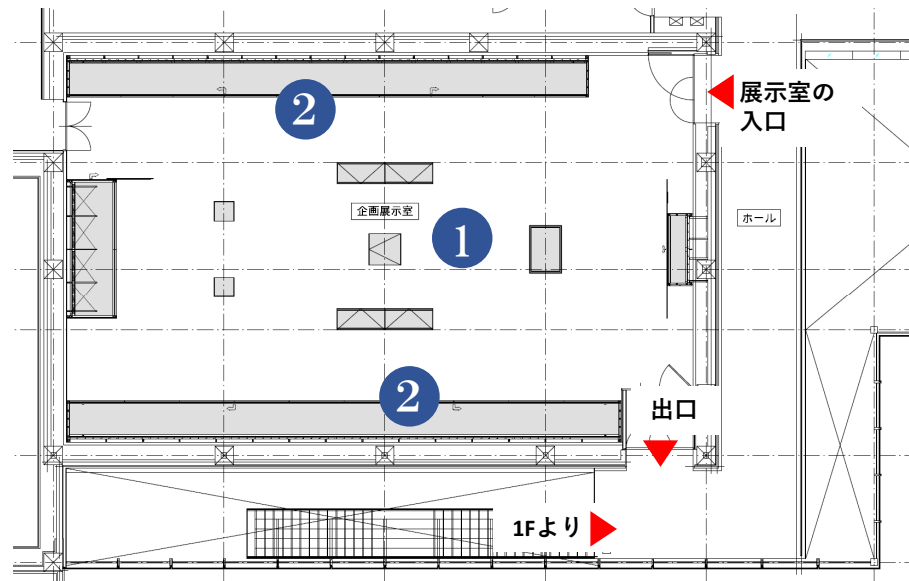


④ 宇和島先人ロード

歴史を駆け抜けた先人たちを通し、宇和島がたどった道を知る

- ・近世近代を軸に優れた人を育み、優れた人から愛された宇和島を紹介。

文化財の魅力や情報を余すことなく紹介、可変性に富んだ魅力溢れる展示空間を目指す



1 企画展示室

既存の資料展示を継承し、自由度の高い、観覧と保存環境に十分配慮した構成

- ・「伊達文化の体現」を中心としつつ、宇和島全域の歴史文化を扱う。
- ・公開承認施設を目指した安心・安全な空間。
- ・これまでの伊達博物館の数多くの文化財展示の実績を活かし、多様な特別展を開催。
- ・資料に応じて、展示台、免震台、照明等を学芸員で調整できる設備整備。



- ・将来的な資料の情報蓄積を想定し、資料のデータベース化を推進。

2 ウォールケース

照明による均質な配光

正面から配灯調整可能

ピン打と酸放出に配慮した下地

正面より資料の出し入れ可能
汚損リスクを最小限に留める

調湿材の正面メンテナンス

